

## 巻頭言

### 広島平和研究所ブックレット第二号

「ふたつの世界大戦と現代世界」の刊行にあたって

広島平和研究所は、一九九八年四月に、人類史上最初の被爆都市「ヒロシマ」の使命として、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向けた学術研究とその成果の発信・提言を目的とする広島市立大学の附置機関として開設されました。広島平和研究所では、これまで、研究や大学教育に取り組み一方で、研究成果を広く市民の皆様に還元する取り組みを進めており、その一環として、平和にかかわる諸問題をテーマに、連続市民講座（年二回）や国際シンポジウム（年一回）等を継続的に開催しております。

昨年度より、広島平和研究所が主催者としてかかわった連続市民講座や国際シンポジウムの内容をお伝えし、現代世界における平和構築に関する問題提起とするため、この小冊子シリーズの「広島平和研究所ブックレット」を刊行しており、今回はその第二号ということになります。

第二号である本書は、「ふたつの世界大戦と現代世界」をテーマに、広島平和研究所主催の二〇一四年度後期の連続市民講座「第一次世界大戦開戦百周年―現代の平和を考えるために」（二〇一四年十一月二日から十二月一九日までの全五回）と二〇一五年度前期の連続市民講座「第二次世界大戦―日本を中心に」（二〇一五年六月十二日から七月一〇日までの全五回）の講義（全一〇回中の九回分）をもとに執筆して頂いた原稿九本を収録しております。

二〇世紀において、人類は、二度の世界大戦を経験しました。二〇世紀は、まさに、戦争と革命と大量死の時代でした。世界的に著名な歴史家であるエリック・ホブズボームが「極端な時代 (Age of Extremes)」と喝破したこの世紀は、さらに、大量生産・大量消費を基礎とした地球の資源と環境の無制限な略奪と改造の時代でもありました。そして、現在、(1) 核・戦争 (2) 環境破壊 (3) 資源・食糧・エネルギー問題等が、人類滅亡の危機が極めてリアルな問題として我々に突きつけられています。この点、殊に、戦争は最大の環境破壊であり、軍備は最大の資源浪費であることを鑑みるなら、これらの危機克服のためには、戦争をいかになくしていくかが課題となります。その視点から見ると、二〇世紀は、国際平和機構の設立（国際連盟、国際連合など）、戦争の違法

化（不戦条約など）や軍縮による平和が試みられた時代であったこともあわせて考えられるべきと思われます。本書では、こうしたふたつの世界大戦の歴史的背景、当時の平和構想の意義と限界、現在に残された課題等をさまざまな視点から論じております。

本書の第Ⅰ部は、「第一次世界大戦開戦百周年―現代の平和を考えるために」をテーマに、「第一次世界大戦とは何であったのか」（第1章 吉川元）、「不戦条約と日本国憲法第九条」（第2章 河上暁弘）、「第一次世界大戦後のドイツの平和運動」（第3章 竹本真希子）、「第一次世界大戦をどう書くか―独仏の例を中心として」（第4章 剣持久木）について検討を加え、いずれも時代的には百年前くらいのことを取りあげつつも、そこから「現代」の課題を浮かび上がらせることを試みた内容となっております。

また、第Ⅱ部では、「第二次世界大戦とは何であったのか」（第1章 吉川元）、「日独伊枢軸と敗戦そして新憲法」（第2章 石田憲）、「他者の戦争経験へのまなざし―フィリピンの日本人戦犯問題をめぐって」（第3章 永井均）、「サンフランシスコ平和条約と戦後処理―残された植民地問題」（第4章 内海愛子）、「日本における戦時核開発と原爆投下の衝撃」（第5章 山崎正勝）について検討を加えています。本年二〇一五年は、戦後七〇年、広島・長崎への原爆投下七〇年の年ですが、これらは、その七〇年において残

されてきた課題もあわせて探ろうとするものです。

いずれも、学界の各分野の専門的視点から、それぞれの問題を考え、問題提起を行ったものであり、読者の皆様が、市民として、研究者として、学生として、またグループ等において、この小冊子を活用して頂ければ、幸いです。

二〇一五年十二月八日

河上 暁弘（広島市立大学広島平和研究所准教授、企画委員長）